

## 知覚動詞の補文構造について

井 上 和 子

### 0. はじめに

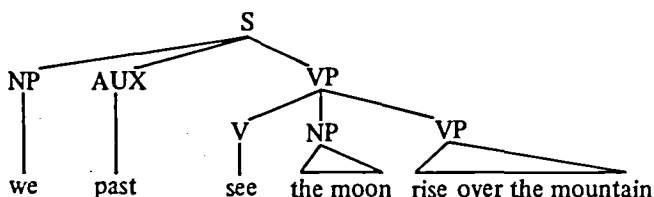
知覚動詞の原形不定詞を含んだ補文（以後 IPVC と略す）と現在分詞を含んだ補文（以後 PPVC と略す<sup>1)</sup>）の相違は、非進行相・進行相というアスペクト上の対立であるとする説は、Fillmore (1963) が生成文法において初めてこの対立を定式化して以後、70年代前半に至る迄一般に容認されていた。すなわち、(1) a., (1) b. はそれぞれ ‘the moon rise over the mountain’, ‘the moon was rising over the mountain’ のような文を基底の補文にもつとされていた。

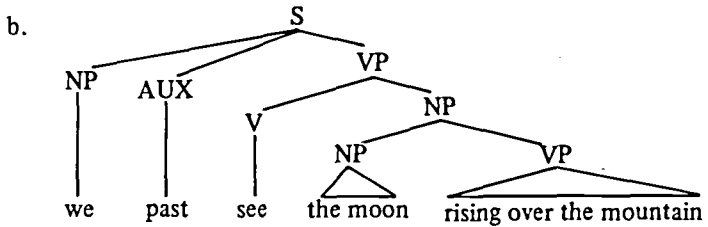
(1) a. We saw the moon rise over the mountain.

b. We saw the moon rising over the mountain.

しかしながら、Akmajian (1977) は自立統語論の立場から、二つの構文がアスペクト上の対立をなしているとする説及びどちらも基底の S-補文から派生したとする分析を否定している。そして(1) a., b. はそれぞれ(2) a., b. の構造をもつとしている。<sup>2)</sup>

(2) a.





PPVC が (2) b. のような構造である根拠として、(i) ‘the moon rising over the mountain’ が一つの構成素である点、(ii) ‘the moon rising over the mountain’ が NP である点に関してそれぞれ (3), (4) のよく知られている統語上のテストにあてはまることを挙げている。

(3) a. What we saw was the moon rising over the mountain.  
(Pseudo-Cleft)

b. We saw what we had all hoped to see: the moon rising over the mountain. (Equative “Colon” Construction)

c. You can see, but you certainly can’t hear, the moon rising over the mountain. (Right Node Raising)

(4) a. It was the moon rising over the mountain that we saw.  
(Cleft)

b. The moon rising over the mountain was a breathtaking sight to see. (Object Deletion)

c. The moon rising over the mountain has been witnessed by many a lover here on Lover’s Lane. (Passive)

d. The sight of the moon rising over the mountain was breathtaking. (深層構造で名詞句の位置に生じるといふ事実)

また、S-補文ではなく (2) b. のような NP を head にもつ NP 構造である根拠としては、(i) 助動詞をもたないこと、(ii) 形に現れた補文標識をもたないこと、(iii) 数の一致に関する(5)のような事実、(iv) 逆行代名詞化に関する(6)のような事実、(v) 再帰代名詞に関する(7)のような事実を挙げている。

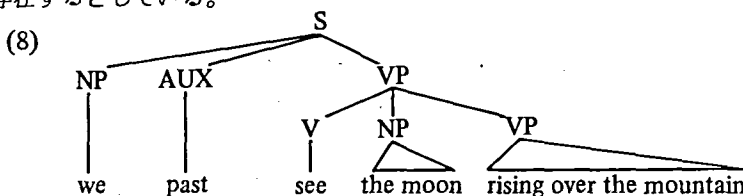
(5) The moon and Venus rising in conjunction have (\*has) often been observed by the astronomers at Kitt Peak.

(6) \*Him playing the piano is a sight as funny as the sight of John dancing on the table. (him ≠ John)

(cf. That he is fairly stupid is a fact that John can't bear to live with.)

(7) I saw myself (\*me) trembling all over (in the mirror).

さらに PPVC に関しては、(2) b. に外置変形がかかった(8)のような構造も存在するとしている。



(8)の構造は、(9)の文におけるような‘the moon rising over the mountain’が構成要素でないことを示しているという一見(3)、(4)の文とは矛盾した状況を説明することになる。

(9) a. What we saw rising over the mountain was the moon.

b. It was the moon that we saw rising over the mountain.

c. The moon was seen rising over the mountain.

IPVCが(2)a.のような非構成要素である根拠としては、(3)、(4)で使ったいずれの統語上のテストにも当嵌らないという点があげられている。

(10)a. \*What we saw was Raquel Welch take a bath.

b. \*It was Raquel Welch take a bath that we saw.

c. \*? We could hear, but we can't see Raquel Welch take a bath.

d. \*Raquel Welch take a bath is a breathtaking sight to see.

e. \*Raquel Welch take a bath has been witnessed by many a moviegoer.

さて、本稿の目的とするところは、次の二点である。第一点は、Akma-

jianの主張の主要な点である二つのPVC'sのアスペクトに関する問題とS-補文か否かの問題に対し、それぞれ反論を提示すること及びそのような立場をとった時の妥当な派生について論じる。もう一点は、K. Inoue (1982)等で示した場所理論に基づく進行形の分析がPPVCにおいても成り立ち、それによってPPVCに関する新たな統語的事実に光をあてることが可能なことを示すことである。前者の点については以下 Sec. 1–Sec. 3で、後者の点については Sec. 4で取り扱う。

### 1. アスペクトに関して

AkmajianはIPVCとPPVCが非進行相 vs 進行相という対立をなしているのではないという事を示す例として(11)のような文の存在を挙げている。

- (11)a. I just can't picture John {owning a mansion.  
  {knowing the answer.  
  {weighing 300 lbs.

b. I just can't see myself needing any more drugs.

(11)で使われている own, know, need のような動詞はいずれも進行形をとらない動詞である。

- (12)a. \* John is owning a mansion.  
      b. \* John is knowing the answer.  
      c. \* John is weighing 300 lbs.  
      d. \* I am needing any more drugs.

従ってもし(12)のような非文がPPVCの補文であるならば、(11)の各文は生成されなかったはずであると主張している。

この主張に対して、Declerck (1981a.)は(11)のような文は通常のPPVCとは異なることをおおよそ次の三つの理由をあげて述べている。(i)このような文は直接的な知覚を表わしていない。(ii) see 以外の知覚動詞ではこのような構文は不可能である。(iii)このような構文はPPVCの構文と異なり、(13)の文のように modal をとることができる：

- (13) I could see myself having to drive her home at the end of the party.

Declerckの以上の指摘のほかに, (11)がPPVCの構文と異なることは(4)及び(9)で使用したいくつかのテストが成り立たないことから明らかである:

- (14)a. \*? It is John needing any more drugs that I can't see.<sup>3)</sup>  
 b. \*? It is John owning a mansion that I can't picture.  
 c. \* John needing any more drugs can't be seen.  
 d. \* It was John that we saw needing some more drugs.  
 e. \* It is John that we can't picture owning a mansion.

以上の事から(11)をPPVCとみなす根拠は乏しいといえる。従ってそれはPPVCが進行形とかかわりをもつという説への反例とはなりえない。

PPVCは進行形とは無関係というAkmajianの主張に対し, Declerck(1981a.)及びGee(1977)は両者の関係を示唆する以下のような事実を指摘している。まず(15)のa., b.を比較してみよう。

- (15)a. She was drowning, but I rescued her.  
 b. \* She was drowned, but I rescued her.

進行形のdrowningは動作の未完結を表わすのに対し非進行形の方は動作が完結したことを表わすので(15) b.は非文である。同様のことは(16)のa., b.についてもあてはまる。

- (16)a. I saw her drowning, but I rescued her.  
 b. \* I saw her drown, but I rescued her.

次に(17)のa., b.の文に注目しよう。

- (17)a. Joan blinked.  
 b. Joan was blinking.

a.ではJoanが一度まばたきしたと解釈されるが, b.ではまばたきの動作が何度か繰り返されたと解釈される。同様の解釈が(18)のa., b.に関しても成り立つ。

- (18)a. We saw Joan blink.

## b. We saw Joan blinking.

同じ関係はそのほかの瞬間動詞についてもみられるが、Gee (1977)は(19)(20)の例文でそれを示している。

(19)a. John jumped once (one time).

b. \* John was jumping once (one time).

(20)a. I saw John jump once.

b. \* I saw John jumping once.

さらに、(21)で動詞‘lean’は進行形をとる時静止状態 (static situation)を表わすので、無生の名詞でも有生の名詞でも主語になりうるが、非進行形の時は行為を表わすので無生の主語は起こり得ない。

(21)a. Bill was leaning against the side of the house.

b. The ladder was leaning against the side of the house.

c. Bill leaned against the side of the house.

d. \* The ladder leaned against the side of the house.

(21)の a.-d. の各文は(22)の a.-d. のそれぞれに並行していることは明らかであろう。

(22)a. I saw Bill leaning against the side of the house.

b. I saw the ladder leaning against the side of the house.

c. I saw Bill lean against the side of the house.

d. \* I saw the ladder lean against the side of the house.

次に動詞‘sit’が‘just’という副詞と使われた時、進行形と非進行形では意味の差が生じる。

(23)a. She just sat there.

b. She was just sitting there.

a. は通常執拗な拒絶 (‘obstinate refusal’)があった事(すなわち、よそではなくそこに彼女は坐った、の意)を示唆するが、b. の方は単なる静止 (‘in-activity’) の状態を意味する。全く同じことは(24)の a., b. の文にもそのままいえる。

(24)a. We saw her just sit there.

b. We saw her just sitting there.

以上おもに Declerck (1981a.) に基づき、PPVCと進行形の関係を示す論拠を意味の側面から挙げてきた。最後に、統語的側面と関連をもつ根拠を一つ指摘したい。Sec. 4では進行形の一つの source が存在を表わす 'be-PP' の構造であることを明らかにするが、その根拠となる例文の一つに(25)のような文がある。

(25) Max was chortling when I got up yesterday morning and he was still *at it* when I went to bed that night.<sup>4)</sup>

すなわち、進行形の V-ing はここでは 'at it' という前置詞と照応関係にある。PPVCが進行形を含む補文から来ているとすれば、(26)の文の 'at it' の存在を同様に説明することができる。

(26) John saw Bill trying to fix his car and Mary saw him *at it*, too.

## 2. 補文 S の存在について

二つの PVC が基底で非構成素あるいは下の(27)のような構造ではなく、(28)のような補文構造をなしている証拠として [A] から [H] までの論拠を挙げる<sup>5)</sup>ことができる:

(27)

$$\begin{array}{c} \text{NP} \\ \swarrow \quad \searrow \\ \text{NP} \quad \text{VP} \end{array}$$

(28)

$$\begin{array}{c} \text{NP} \\ | \\ \text{S} \end{array}$$

[A] 深層主語にしかなりえない要素をとりうる。<sup>6)</sup>

(29)a. We heard it raining cats and dogs.

b. We saw it snow in Columbia.

c. We heard all hell { break } loose.  
                                  { breaking }

[ B ] (30)の a., b. の文において再帰代名詞 *himself* は *Bill* のみをさす。

(30)a. John saw Bill looking at himself (in the mirror).

b. John saw Bill take a glance at himself (in the mirror).

再帰代名詞は主語の NP と同一指示的であるので、上の事実は *Bill* が補文 S の主語であることを意味する。また(31)の文で代名詞 *him* は *Bill* ではなく *John* をさしている。

(31) John saw Bill walking to him.

もし *John* と *him* が同じ S の中にあるなら、*him* ではなく *himself* となっていたはずである。従ってこれは *John* と *him* が別の S に属している、すなわち *him* は補文 S に属していることを意味する。

[ C ] (32)の文において *him* は *John* をさす。

(32) Mrs. Hicks calling *him* could not be heard by *John* because he was sleeping.

もし *him* が埋め込み文にないならば、代名詞 *him* は *John* に先行し、統御していることになるので、この照応関係は成り立たなかったはずである。この例は Akmajian が S-補文ではない根拠とした(6)の例と著しい対立をなすものである。

[ D ] もし PPVC が S を含むのではなく、(2)b. のような名詞が主要部をなす NP 構造であるなら、照応代名詞の性と数は主要部をなす名詞のそれによって決まることになる。しかしながら、PPVC の場合それはあてはまらない。

(33)a. What/\*Who I heard was John laughing.

b. What/\*Whom we saw was two girls playing together.

これは再び PPVC が S から来ていることを示唆するものである。

[ E ] Postal (1974) が記している様に、‘by oneself’ のような副詞句は、主語の NP とのみ関係している。

(34)a. John spoke to Mary by himself.

b. \*John spoke to Mary by herself.



しかしながら、(35)の両文では *by himself* は *we* ではなく *John* と結びついている。

(35)a. We saw John paint the whole house by himself.

b. We saw John painting the whole house by himself.

[F] Quantifier Shift は数量詞を含む NP が代名詞でないならば、主語の NP にしか適用されないことが一般に認められている。

(36)a. All the men left.

b. The men all left.

(37)a. \*We met all the men.

b. \*We met the men all.

c. We met them all.

しかるに (38), (39) においては、主文の主語でない NP 中の数量詞も移動しうる。

(38)a. We heard all the girls screaming with fear.

b. We heard the girls all screaming with fear.

(39)a. We heard all the girls ask for hot chocolate.

b. We heard the girls all ask for hot chocolate.

[G] (40)の例文が示している様に、IPVC は代名詞 'it' と照応関係をもつ。この 'it' は(28)における様な補文 S の "anaphor" と考えられる。

(40) I saw John hit the little girl and Mary saw it too.

[H] IPVC に関してはまた、(41)の文で 'Mary' は Specified Subject Constraint に従うことから、S または少なくとも NP でなければならぬことは明らかである。

(41)a. \*We saw Mary kiss each other.

b. We each saw Mary kiss the other.

以上 [A] から [H] を IPVC, PPVC が補文 S をもつことを示す論拠としてあげうる。<sup>7)</sup> これらの論拠は Akmajian が(2) a., b. の構造を設けるために用いた論拠と対立する。とりわけ IPVC に関して、(10)のテストにかか

らないという理由から、非構成素と断定している点と対立するので、この点に関して以下検討したい。Gee (1977) は注で、Akmajian の使用したこの構成素テストに対し Chomsky が疑問をはさんだことを記している。そこで Chomsky は補文標識をもたない S は文の焦点に起こりえないと指摘している。例えば、下の(42),(43)における a, b. 両文の文法性の違いはそれを示している。

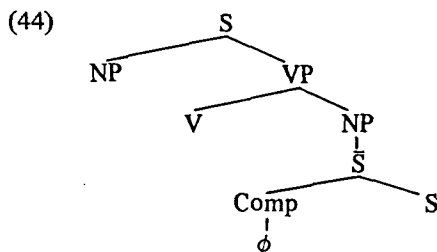
(42)a. What we wanted was for John to tell the truth for a change.

b. ?\*What we wanted was John to tell the truth for a change.

(43)a. What I know is that John lied.

b. ?\*What I know is John lied.

従って IPVC の場合、表面上は補文標識をもたない S-complement と仮定するならば、構成素テストにはかからなくても非構成素ということにならない。すなわち、(44) のような構造であると考える：



(44) の構造は IPVC ばかりでなく PPVC の基底構造でもあるというのが本稿の主張するところである。それを裏付ける例は(45)である。

(45)a. \* What we saw was it snowing on the mountain.

b. \* We saw what we had all hoped to see: it snowing on the mountain.

c. \* You can see, but you certainly can't hear, it snowing on the mountain.

d. \* It was it snowing on the mountain that we saw.

e. \* It snowing on the mountain was a beautiful sight to see.

## f. \*It snowing on the mountain was seen by John.

(45)の各文は Akmajian が使用した構成素及び NP のテストによって (10)の各文と同様非文となったものである。 Akmajian の論法に従うなら、この 'it snowing on the mountain' は NP でないばかりか構成素でないことになる。そうすると同じ PPVC でありながら、 'the moon rising over the mountain' は NP で 'it snowing on the mountain' の方はそうでないことになる。<sup>8)</sup>しかしながら PPVC が(44)のような基底構造をもつとしても、ではなぜ 'the moon rising over the mountain' の場合には構成素及び NP のテストに可となり 'it snowing on the mountain' の方は不可となったのであろうか。この問題は次の節において PPVC の派生の問題との関係で解答することになる。

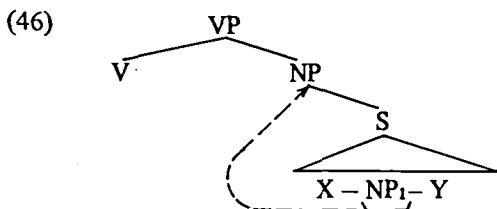
## 3. PPVC の派生について

上記 1, 2 において PPVC が進行形を含む sentential source をもつことを示してきた。しかしそれだけでは Akmajian が(2) b. の構造を設定する根拠とした数の一致や再帰代名詞に関する(5), (7)のような事実との関係はまだ説明されてはいない。

両者を関係づける二つの方法が考えられる。一つは Raising により、believe, expect などの動詞の場合と同様、補文の主語を母型文の目的語とし(8)のような構造とする方法である。<sup>9)</sup>この方法の利点は、目的語に再帰代名詞をとることを説明できるだけでなく IPVC の構文の派生に関しても統一的な説明を可能にすることである。しかしこの方法の致命的な欠陥は PPVC が一つの構成素であることを説明しえないという点である。<sup>10)</sup>従って(5)の数の一致の問題も説明不可能になる。<sup>11)</sup>

もう一つの方法は、Declerck (1981b.) が提案している 'Pseudo-Modifier Creation' という変形を用いる方法である。Declerck は表面上は修飾節(modifying clause)であるが制限的(restrictive)でも同格的(appositive)でもない四つの種類の関係節・分詞節があると指摘し、それらを 'pseudo-

modifier' と呼んでいる。そして PPVC を 'pseudo-modifier' の一つに位置づけている。<sup>12)</sup> 'pseudo-modifiers' は NP によって支配されている S から NP を引き出しその S に sister-adjoin し [NP-S] の構造をつくり出す 'Pseudo-Modifier Creation' という変形の結果生じたものだと言っている。この変形はおおよそ (46) のように図示される。



PPVCは制限的あるいは同格的な分詞節のどちらでもないことは、固有名詞や (1) b. の 'the moon' のような唯一物を表わす名詞を head noun としてとりうること、noun head のあとに intonational break がないことなどから明らかである。従って PPVC を 'pseudo-modifier' とみなすことはきわめて妥当な分析といえる。また、彼が指摘している様に、フランス語やイタリア語では知覚動詞は分詞ばかりでなく、NP と関係節からなる補語とも共起しうるということは、'pseudo-modifier' であることの傍証となりうる：

(47) J'ai vu Jean qui courait.

'I saw John who was running.'

(48) Sento Giovanni che suona la chitarra.

'I hear John who is playing the guitar.'

さて、PPVC をこの様に 'Pseudo-Modifier Creation' によって導き出す利点は、(i) PPVC が一つの構成素であること、(ii) 目的語に再帰代名詞をとる事実、(iii) 数の一致に関する事実、(iv) 前節でふれた 'the moon rising over the mountain' と 'it snowing on the mountain' の相違、の四点が説明可能となることである。(iv) に関しては、'the moon rising over the mountain' も 'it snowing on the mountain' も共に (44) のような補文構

造を基底にもつが、前者の場合には ‘Pseudo-Modifier Creation’ の規則が適用されたのに対し、後者の場合には適用されなかったため IPVC の場合と同様、補文標識をもたない S として非文となったと解せられる。‘it snowing on the mountain’ の ‘it’ のような修飾節の head になり得ない代名詞はこの変形規則適用への制約が課されると考えられる。以下(49), (50)も同様の理由からと思われる。<sup>13)</sup>

(49)a. \* What we heard was it said this morning.

b. \* It is it said that I have heard.

c. \* It said has been heard.

d. \* It has been heard said by us all.

(50)a. ? What I’ve never seen is him ill.

b. \* It is him ill that I’ve never seen.

c. \* Him ill I’ve never seen.

#### 4. 場所理論に基づく進行形の分析と PPVC

4.1. K. Inoue (1982) 等において言語の意味表示に関して以下の様な仮説を唱えてきた： (i) 言語の殆んどすべての動詞の意味表示は存在あるいは場所にかかわる表現との関係で記述できる。(ii) 動詞の意味表示の基本を場所的關係とすると、言語の基本的構文は意味表示のレベルではきわめて少数のパターンに還元される。そして以下の様な三つのパターンが基本であると考えられる。

(51)i. BE X (Y)

ii. BECOME [BE X (Y)]

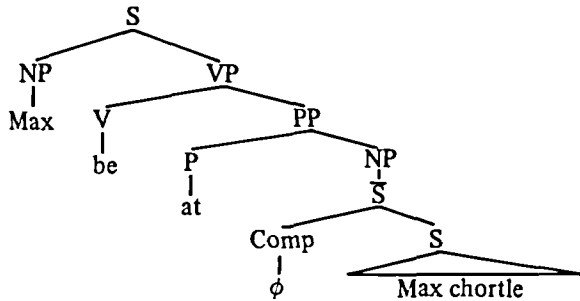
iii. CAUSE Z [BECOME [BE X (Y)]]

BE, BECOME, CAUSE などの大文字で表わしているのは意味要素であり、X, Y, Z は変項で、X は Gruber (1965), Jackendoff (1973) の意味での ‘theme’, Y は ‘location’, Z は ‘event’ を表わす。パターン (i) は状態動詞の構文、(ii) は状態変化の動詞の構文、(iii) は使役動詞の構文、の意味表

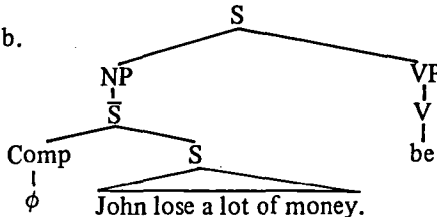
示の枠組となる。

進行形は (i) のパターンに属し, (52) a., b. のような二つの source から来ていると考える。

(52)a.



b.



a. の構造では Max が 'theme', 'Max chortle' という文が 'location' である。これは 'John is at the station' のような存在文と本質的に同じ構造である。b. の構造では 'theme' が 'John lose a lot of money' という文の one-place predicate の構造である。

まず a. の構造を裏付ける論拠を [A] から [E] まで挙げる。

[A] (25) の例文で示した様に, 進行形の V-ing は 'at it' という前置詞句と照応関係にある。

[B] where を使った疑問文の返答として場所を表わす副詞と同様に進行形の構文も使うことができる。

(53) Where's Joe? – He's reading.

[C] at を使った疑問文の返答に進行形の構文がなりうる。

(54) What are you at now? – I'm getting these reports ready.

[D] 存在文と進行形は等位接続詞で結びつけられる。

(55) He is in bed and reading a book.

[E] 存在文と容易に述語を共有しうる。

(56) He is at home in bed reading.<sup>10)</sup>

(52) a. に対して b. の構造を進行形のもう一つの source としてたてる根拠には以下の [A] から [C] を挙げることができる。

[A] (25), (53) – (56) という a. の構造を支持する進行形の文に対して、以下の進行形を含む文はそれがあてはまらない。

(57) a. \* John was losing a lot of money in 1957 and he was still at it the next year.

b. \* The boy was being beaten by his mother when I saw them at ten o'clock and he was still at it when I saw them again ten minutes later.

(58) a. Where's the computer? – #It's working.<sup>15)</sup>

b. Where's Mary? – #She's being kissed by John under the bushes.

(59) a. What is he at now? – #He's losing a lot of money.

b. What is he at now? – #He's being scolded by his father.

(60) a. \* The water is in the kettle and bubbling.

b. ? John was in the living room being scolded by his father.

[B] 二番目の根拠は(61)のような非人称構文にかかわる, rain のような天候を示す動詞は, 表層構造では代役主語 (dummy subject) it をとる。

(61) It was raining.

もし(61)の文が(52) a. のような基底構造をもつなら, この代役要素を動詞 be の主語としても規定しなければならなくなる。もし(52) b. のような基底構造をもつなら, 埋め込み文は 'it rain' ということになるので, 正しい表層構造はすでにほかの根拠から認められている規則により自動的に派生することになる。

[C] make headway, have recourse to, keep tabs on などのイディオ

ムを含む(62)のような受身の進行形の文の派生を考えてみよう。

- (62)a. Significant headway was being made on important tasks  
without great efforts.
- b. Recourse was being had to illegal methods.
- c. Tabs were being kept on even the most moderate war critics  
by the FBI.

これらの headway, recourse, tabsなどは単独で自由にどんな環境にでも起こるわけではなく、make headway, have recourse to, keep tabs on という fixed phrase でのみ現れる。従って(52) a.のような構造の母型文の主語の位置を占めることはあり得ない。もし(52) b.のような構造をもつなら、(61)の文と同様すでに認められている規則によって正しい表層構造を得られることになる。

4. 2. 以上 4. 1.において進行形には二つの source があることを論じてきた。以下 PPVCにおいてもこの二つの sourceの対立があることを確認してみたい。

[ A ] (53)と(58)に相当する対立は(63), (64)の対立となって現れている。

(63) Where's Joe? – I saw him reading.

(64)a. Where's the computer? – #I saw it working.

b. Where's Mary? – #I saw her being kissed by John.

[ B ] (54)と(59)の間にみられる対立は(65)と(66)の間にもみられる。

(65) What is heat now? – I have just seen him reading.

(66) What is he at now? – #I have just seen him being scolded  
by his father.

[ C ] 'at it'に関係する(25)と(57)に相当する対立は以下の(67)と(68)にみられる。

(67) John saw Bill trying to fix his car and Mary saw him at it too.

(68) \* John saw the wheel turning and Mary saw it at it too.

[ D ] 述語 “be” の共有にかかわる(56)と(60) b. の対立が以下(69),



(70)にみられる。

(69) I saw him in bed reading.

(70) \*I saw the computer in the room working.

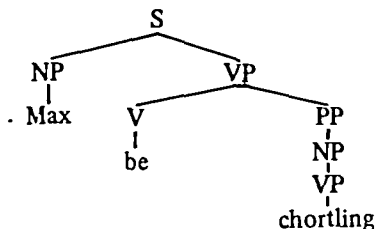
[E] 場所を表わす前置詞句と進行形の等位接続にかかわる(55)と(60) a.に並行した事柄は(71), (72)の知覚動詞の complementでも観察できる。但し, (71)の場合は(55)よりは容認度はやや低くなる。

(71) I saw Bill in bed and reading a book.

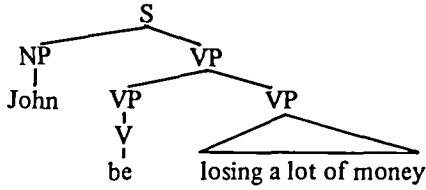
(72) \*I saw the water in the kettle and bubbling.

以上進行形の二つの source が PPVCに反映されていることを示す論拠を観察してきた。この節の最後に(52) a., b.からの派生について少し触れておきたい。a.の構造とb.の構造の派生における主たる相異は、前者は Equi-NP Deletion, 後者は Raisingによって生成される点である。また、前者にはこのほか at を消去する Preposition Deletion がかかる。なお、進行形の Ing に関しては変形によって挿入されたものとする。Ing のつく complements は従来すべて Poss-Ing complements として sentential sourceに由来するとされていたが、Horn (1976)は Poss-Ing complements と Acc.-Ing complements の統語的特徴の違いを指摘し、前者は sentential sourceに由来しない NP 構造をなし、後者は sentential sourceをもつと結論づけている。Acc.-Ing complements の特徴である(i)補文内からの extraction が可能、(ii) cleft focus position に起こらないなどの理由から、進行形の Ing は Acc.-Ing complement であると考えられる。(52) a., b.に以上の様な変形がかかって得られる派生句構造は以下の様である。

(73)a.

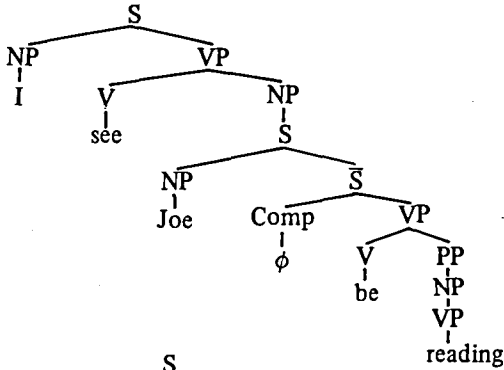


b.

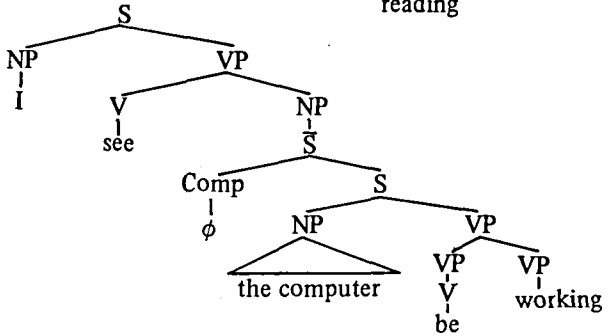


従って(73) a., b.の構造が補文に埋めこまれた PPVCの基底構造は(74) a., b.である。

(74)a.



b.



(74) a., b. に Be-Deletion 及び 'Pseudo-Modifier Creation' がかかって通常の PPVC の表層構造が得られる。この Be-Deletion は(75)の a.-c. のような知覚動詞の構文の派生も統一して説明することを可能にする。

(75)a. I've never seen him ill.

b. I heard it said this morning.

c. I saw Bill in bed.

## 5. 結び

本稿では IPVC と PPVC の二つの知覚動詞の構文に、(a) 非進行相 vs 進行相というアスペクト上の対立が観察できること、及び (b) どちらも補文標識をもたない補文 S から派生したものであることを明らかにしてきた。従って以上の議論が妥当なものであるなら、IPVC と PPVC が別の構造であるとする Akmajian の主張は成り立たないことになる。PPVC とは換言すれば、補文に be 動詞を含む IPVC であるからである。また、Akmajian が知覚動詞の補文構造を論じた目的は、統語論の自立性という仮説への一つの論証とすることであった。しかしながら、これらの構文に関する限り、統語論の自立性への論証とはなりえないというのが、本稿の議論の結果として言えることである。

本稿ではまた、K. Inoue (1982) 等で示した場所理論の立場からの進行形の分析が PPVC においても成立し、この観点に立つならば PPVC に関する新たな統語的、意味的事実をも説明可能となることを示唆してきた。このような進行形としての Ing-補文の分析は、以下のような使役動詞の補文構造にも適用できると思われる。

(76)a. He *had* his students doing a survey of voting behavior.

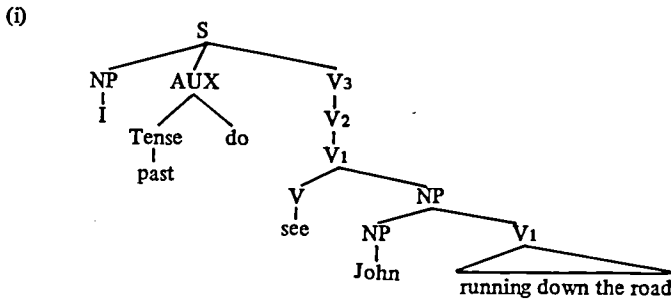
b. He *got* his students doing a survey of voting behavior.

c. He *kept* his students doing a survey of voting behavior.

## NOTES

1) IPVC, PPVC はそれぞれ Infinitival Perception Verb Complement, Participial Perception Verb Complement の略である。

2) Akmajian (1977) の段階では be-ing は Aux で生成されるという立場をとっていたが、Akmajian, Steele and Wasow (1979) では三つのレベルの VP のうち V<sub>2</sub> で生成されると、考えを変えている。しかしながら、PPVC は (2) b. と同様 NP の head に V<sub>1</sub> の complement がつづく complex NP complement と分析している：



従って Akmajian の立場の変化は、ここでの議論に影響を及ぼすものではない。

3) 本稿に使われている用例は、特に出典の明示がない限り、すべて筆者が作文し、一人以上の *native speaker* のチェックをうけている。

4) (25)は Ross (1969) に拠る。

5) 以下の論拠のうち、(29), (40), (41) の例文は Gee (1977) に、(30) a., (32), (33), (34), (35) b., (36), (37), (38)は Declerck (1981b.) に拠る。

6) Akmajian は 'subject', 'object' などの文法関係は *lexicon* で規定されるので、このような例文は S-補文の根拠になりえないとしている。そして次のような *lexical redundancy rule* をもって文法関係を説明しようとしている。

$$(i) \quad [NP^1 \text{---} NP^2 VP^1] \rightarrow [NP^1 \text{---} NP^2 \text{---} [V \text{ X}] ]$$

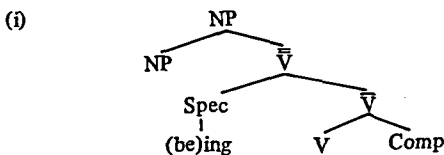
しかしながら、このような規則は成り立たない。なぜなら、下の (ii) の a., b. の文の文法関係を正しく捉え得ないからである。

(ii) a. John got Bill to leave.

b. John promised Bill to leave.

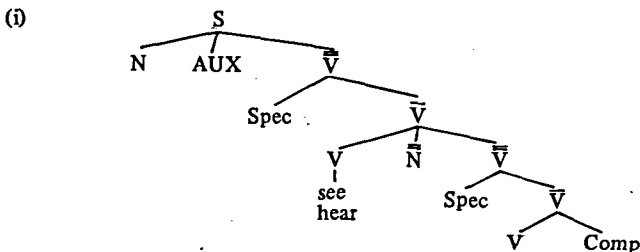
7) [B], [C] における様な照応関係に関わる意味解釈を S サイクルではなく、NP サイクルとして行うことも勿論可能である。しかしながら、どのみち IPVC に関しては NP という構成素であることは認めなければならなくなる。また、NP サイクルで代名詞や再帰代名詞の解釈を行った場合、そのような解釈規則は従来 S とされていた [NP VP] という構造とそれ以外の NP 構造との区別をする必要に迫られることは必至である。

8) 同じ問題は、PPVC の -ing を進行形とみなし (i) のような基底構造を PPVC に設定している Gee (1977: 481) にも起こる:



9) この種の Raising の変形規則としての存在は否定される傾向にある。しかしこの操作を Raising にかわる 'Restructuring' で行うにしても、補文 S からの PPVC の派生の方法を問題にしていることでの議論に大した影響を及ぼすものではない。

10) 同じことは (i) のような基底構造を IPVC, PPVC の両方に設けた Gee (1975) の分析にもいえる:



11) Akmajian はこのほか(6)の逆行代名詞化にかかわる事実も PPVC が sentential source をもつという説への反例として提示している。しかしながら、(6)は知覚を表わしているが知覚動詞の構文ではないので、反例としては不相当と思われるので、ここでは敢えてとりあげなかった。

12) Declerck は PPVC のほかに 'pseudo-modifier' としているのは以下の様な構文である:

(i) (What was that? という質問の答として)

It's Little Jimmy who has fallen down the stairs.

(ii) I can't conceive a decent girl saying such things.

(iii) Two girls who all of a sudden crossed the street caused the accident.

この四つの種類の 'pseudo-modifier' がそれぞれどのように異なるかについては Declerck は殆んど述べていない。その点を明確にすることが PPVC を 'pseudo-modifier' として位置づける上での今後の課題だと思われる。(特に (ii) と PPVC の相違については明らかにする必要がある。)

13) 4.2. で示すように形容詞、過去分詞、前置詞句を含む PVC の構文も PPVC と同様(44)の補文構造に Be-Deletion が適用されて派生したものと分析する。

14) (53) - (56) は Bolinger (1971) からの用例。

- 15) #は質問の答として不適切であることを表わす。

## REFERENCES

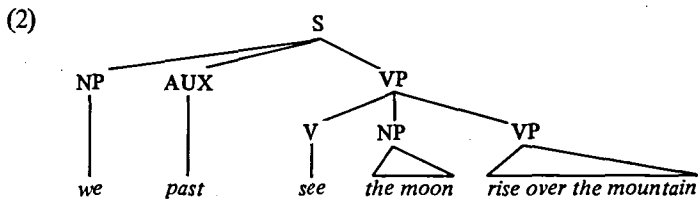
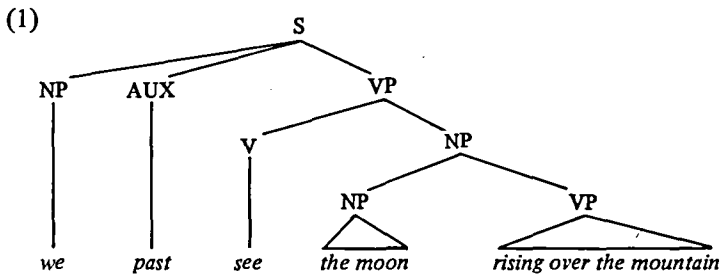
- Akmajian, A. 1977. The complement structure of perception verbs in an autonomous syntax framework. In: P.W. Culicover, T. Wasow, A. Akmajian (eds.), *Formal syntax*. New York: Academic Press.
- Akmajian, A., S. Steele, and T. Wasow. 1979. The category AUX in universal grammar. *Linguistic Inquiry* 10, 1-64.
- Bolinger, D. 1971. The nominal in the progressive. *Linguistic Inquiry* 2, 246-250.
- Declerck, R. 1981a. On the role of progressive aspect in nonfinite perception verb complements. *Glossa* 15, 83-114.
- Declerck, R. 1981b. Pseudo-modifiers. *Lingua* 54, 135-163.
- Fillmore, C.J. 1963. The position of embedding transformation in grammar. *Word* 19, 208-231.
- Gee, J.P. 1975. Perception, intentionality and naked infinitives: a study in linguistics and philosophy. Unpublished doctoral dissertation, Stanford University.
- Gee, J.P. 1977. Comments on the paper by Akmajian. In: P.W. Culicover, T. Wasow, A. Akmajian (eds.), *Formal syntax*. New York: Academic Press.
- Gruber, J. 1965. Studies in lexical relations. Unpublished doctoral dissertation, MIT.
- Horn, G.M. 1975. On the nonsentential nature of the poss-ing construction. *Linguistic Analysis* 1, 333-387.
- 井上和子, 1979. アクベクト動詞の起源に関して一進行相を中心として—女子聖学院短期大学紀要第11号, 45-58.
- Inoue, K. 1982. Syntax and semantics of stative constructions. — An approach based on a localistic hypothesis of the verb —. *Gengo Kenkyu* 81, 29-59.
- Jackendoff, R.S. 1972. *Semantic interpretation in generative grammar*. Cambridge, Mass.: MIT Press.
- Kirsner, R. and S. Thompson. 1976. The role of pragmatic inference in semantics: a study of sensory verb complements in English. *Glossa* 10, 200-240.
- Postal, P.M. 1974. On raising: one rule of English grammar and its theoretical implications. Cambridge, Mass.: MIT Press.
- Ross, J.R. 1969. Auxiliaries as main verbs. In: W. Todd (ed.), *Studies in philosophical linguistics, Series One*. Carbondale, Ill.: Great Expectations Press.

寺津典子, 1978, 動詞の補文構造を決定する証拠について: 使役動詞, 知覚動詞の補文構造を考察して. 富山大学人文学部紀要第2号, 1-12.

## On the Complement Structure of Perception Verbs

Kazuko INOUE

Akmajian (1977) argues from the standpoint of autonomous syntax that participial perception verb complements (henceforth: PPVC's) and infinitival perception verb complements (henceforth: IPVC's) derive from single NP constituents with heads as in (1) and nonconstituents as in (2), respectively:



Along with this, he rejects the view that what distinguishes PPVC's from IPVC's is the progressive aspect.

The purpose of this paper is twofold. One is to argue, as counter-arguments to Akmajian's analysis, that the two complements come from a common sentential complement and that the contrast between



them is one of nonprogressive vs. progressive aspect. The other is to show that an analysis of the progressive made in K. Inoue (1979, 82) within the framework of 'localistic' theory will shed new light on the account of syntactic and semantic behavior of PPVC's.

In Sec. 1 I present a number of arguments which indicate that the relation between IPVC's and PPVC's corresponds to that holding between nonprogressive and progressive constructions. In Sec. 2 I give arguments for the underlying structure of two PVC's being a sentential complement and suggest, by drawing attention to the fact that complementizerless sentences cannot occur in focus position, that Akmajian's argument for (1) on the basis of the constituent structure tests such as Pseudo-Cleft, Cleft, etc. does not hold and that we can assign IPVC's as an  $\bar{S}$  complement with a null complementizer. Moreover, I point out a case of PPVC which likewise fails in Akmajian's tests and thus suggests that PPVC's have the same underlying structure. Sec. 3 is devoted to the discussion as to how to derive PPVC's from a sentential complement, i.e. how to account for the facts like Number Agreement which Akmajian claims constitute evidence for the head-complement structure of PPVC's. There are two ways conceivable to resolve this seemingly paradoxical situation: One is Raising, and the other, 'Pseudo-Modifier Creation', a transformation proposed by Declerck (1981b.). I support the latter over the former, because it can account for the facts Akmajian's arguments are based upon as well as the above-mentioned exceptional case of PPVC. Sec. 4 is concerned with an analysis of the progressive from a 'localistic' point of view and its relation to PPVC's. It is shown that the two sources I postulate for the progressive in K. Inoue (1979, 82) are reflected in PPVC's.

From the above, we come to a conclusion that as far as PVC's are

concerned, the hypothesis of 'autonomous syntax' does not hold.